

二風谷イタの概要

1. 二風谷イタとは

沙流川流域に古くから伝わり、現在は主として平取町二風谷で伝統的技法が継承されている、木製の浅く平たい形状のお盆のことで、地域の特徴である、モレウノカ・アイウシノカ・シクノカ・コイノカなどのアイヌ文様が木彫により施されている。



2. 工芸品の特徴と手工業性について

(1) 特徴

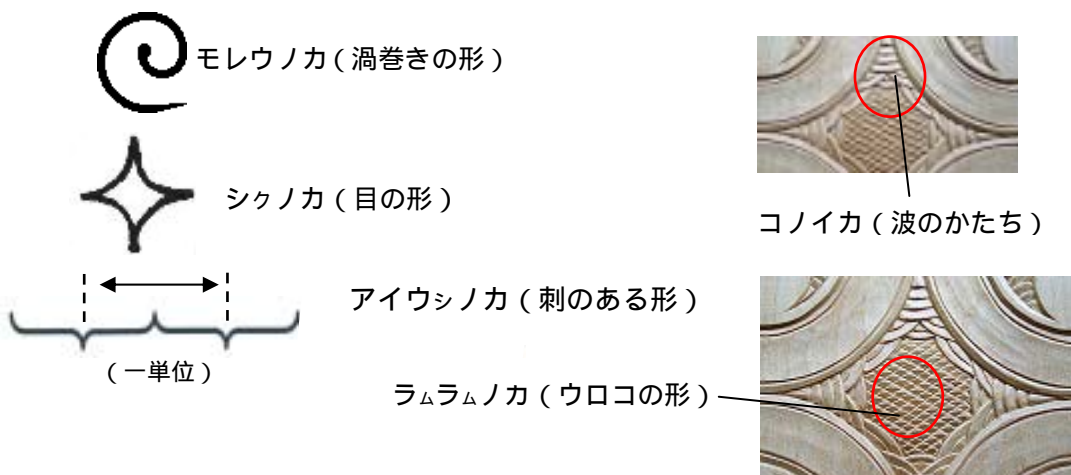
日常生活で長く使用できる実用品でありながら、モレウノカ(うずまき・形を模したもの)、アイウシノカ(刺がある・形を模したもの)、シクノカ(目・形を模したもの)、コイノカ(波の形)などのアイヌ文様、ラムラムノカ(ウロコ・形を模したもの)と呼ばれるウロコ彫りが施されている、美しさも兼ね備えた工芸品と言える。

アイヌ文様の主な構成要素と二風谷地域の特徴

アイヌ文様の構成要素は以下のようなデザインを有しており、それらの組み合わせによって、作り手によりイタ全体のアイヌ文様が形成される。

なかでもウロコ彫りは、二風谷イタには必ず見られるもので、その技術は現在も継承されている。ウロコ彫りを一つの作品に多く使用するの、この地域の特徴でもある。なお、現在、道内の他地域でウロコ彫りが入ったものも見られるが、中には二風谷の模倣であったり、二風谷ではウロコ彫りを必ず木目を縦方向にして彫るところを横方向にして異なった彫り方がされている例もみられる。

ウロコ彫りは地域に伝わる地模様的一种で、文様と文様の間のスペースをデザインとして埋めるラムラムノカ(ウロコの形)を巧みに使用しているのも地域の特徴と言える



他地域との比較

北海道内の他地域のイタを見ると、放射状であったり、モレウノカやシクノカ等のアイヌ文様がなかったりと、アイヌ文様が基調となっている二風谷イタとは明らかに異なっていることがわかる。



(出典：北海道大学博物館データベース)

証明・説明資料

出典：アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌（上）』第一法規出版、1969、p.223～230

< 抜粋箇所 >

アイヌの文様は、切伏せと刺繍がそれぞれ特徴ある形をあらわすこともあるが、多くは両者の組み合わせによって形成されるものである。次にその単位となる形態を述べよう。文様のことをシリキという。

1. アイウシ文（アウシ文）

これは上述のごとく刺がある文様という意味であるが、数学につかう括弧に似ているので、括弧文といわれている。これが連続してあらわれるが、向かい合って網の目状に並び、その間に直線があってこの網の目を二分することもある。試みに魚網をとってこれを横にかるく張れば、このアイウシ文の複合連続文をあらわすことができる。（写真 81）

アイヌの服飾文様にはこのアイウシ文は非常に多く用いられており、アイヌ文様の重要な要素となっている。このアイウシ文は他の民族の文様にはあまりあらわれないものであり、アイヌ文様の特徴がこれであるといっても過言でないと思う。わが国では衣裳文様として網の目文様があることはあるが概して少ない。考古学的には千網土器に定型的なアイウシ文が見られた。これは関東地方の縄文晩期の最末期のものであるが、こんなにみごとにあらわれることはまれである。

2. モレウ文

これは既述のごとく、ゆるやかに曲がる文という意味で、かんたんな渦巻文である。巻きかたは少なく、一巻き半またはそれ以下のものである。アイヌ衣服にあらわれるものは、多くは二個並んであり（ウレン・モレウ）、対称的に外巻きすなわち背中合わせに並ぶものであるが（図 27 の 2）、このほか内巻きすなわち向かい合わせに並ぶものもある。またまれに一個だけ単独にあることもある（図 27 の 2）（エアラ・モレウ）。これは衣服の背面正中線上にあらわれる。この単独のものは刀掛惜（エムシアツ）の垂飾布などにしばしば見られる。またモレウ文に刺状の突起がつくことがあり、これをアイウシ・モレウという（図 27 の 3）またモレウ文の先端が曲玉状になったものをモレウエトコ文（図 27 の 17）という。

3. シク文

これは菱形または三角形の文様であって、アイウシ連続文の間にあらわれることが多く、古いアツシには必ず見られるものである。なおシク文の一角を丸形で埋めたものをルートルセシケという。（図 27 の 8、9）

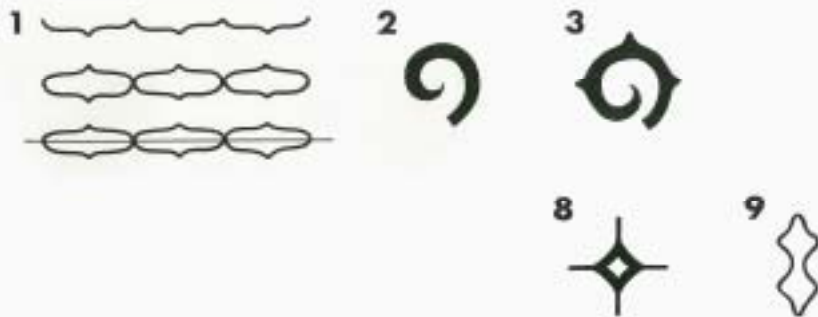


図27 アイヌ文様
1 アイウシ、2 モレウ、3 アイウシ・モレウ、

8、9 シク文

(2) 手工業性

二風谷イタの製造工程は、型取り、文様彫り、ウロコ彫りなど多岐にわたっており、それぞれの工程において手作業となっている。

3. 沿革・伝統性について

(1) 生産の沿革

100年以上前から沙流川流域に住むアイヌの人々(sar-un-kur)などによって受け継がれてきた。江戸時代(安政年間)には、沙流場所(沙流川流域)からイタである半月盆や丸盆が献上品として記録されていることから、当時すでに、沙流川流域で作られたイタが他には類を見ない優れた土地の産品として重要視されていたことが伺える。1904年には、フレデリック・スターによって収集されたアイヌ工芸品に、この地域のイタを始めとする木彫品が記録されている。

「表3 安政年間における各場所の献上品」

北海道北方民族博物館研究紀要 第8号(1994, 3)

表3 安政年間における各場所の献上品

山越内	船2隻 板オシキ5枚 筆立5箇 筵百合粉1袋 干藪10枚 干藪15本
虻田	木刀5本入3箱
有珠	キナ簍2枚 帆立貝30枚 干藪2束
室蘭	杓子20本 キナ簍2枚 糸巻200枚
幌別	手拭掛4本 糸巻20本 間切鞘4本
白老	キナ簍2枚 手拭掛20本 糸巻30枚
勇拂	半月盆5枚 手拭掛10本 キナ簍2枚
沙流	麻蓋5枚 半月盆5枚 丸蓋5枚 手拭掛5本 笠2枚 大豆・小豆・柿・葉(各各升)
新冠	杓子30本 唐太極30枚 筆立5本 筆軸30本 間切鞘5本

* 村居元長「あいぬ風俗略志」(明治25年)より引用
「土産献上物と云ふも各場所に依り種類を異にし時代に依りても多少異なり安政年間の一斑を掲ぐれば左の如し」との前置がある。

また、1890年代(明治20年代)には二風谷の貝澤ウトレントク、貝澤ウエサナシが、沙流川流域独自の文様を彫り込んだ盆や茶托等を制作・販売していたことが伝えられている。二人の作品は現存しており、100年以上前の当時から現在まで変わらぬウロコ彫りなどのアイヌ文様入りのイタが作り続けられ、伝統的な技法が継承されていることは明らかである。

第9章 スターが収集したアイヌ資料のリスト

《1》スターが1904年に収集した資料

[Fieldnotes: Japan Trip, 1904, Nos. 1-3 による]

1. Carrying strap [U. Piratori]
2. Wooden spoon. [U. Piratori]
3. Sack of bark [U. Piratori]
4. Bark roe tray [U. Piratori]
5. Bark baler ladle [U. Piratori]
6. Blunt bear arrow [U. Piratori]
7. Moustache lifter [U. Piratori]
8. Thread winder-carved. [U. Piratori]

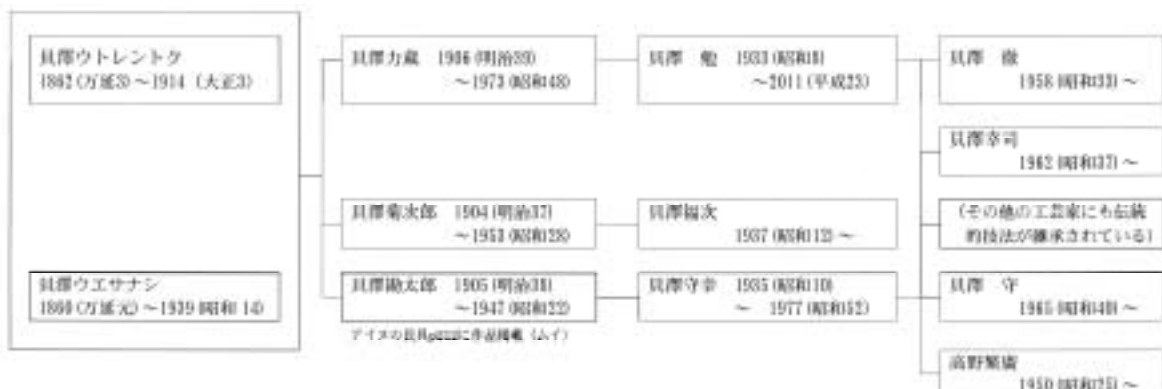
115. Quiver, bow, arrows-poisoned. [Niptani]
116. Carved tray. [Piratori] 平取の「イタ」の記述
117. Apron dress, aprons, belt, etc. [Piratori]
118. Trays-carved. [Niptani] 二風谷の「イタ」の記述
119. Bark dish--small. [Niptani]
120. Bear paw pads. [Niptani]

「イタ」貝澤ウエサナシ 作
(平取町立二風谷アイヌ文化博物館)



写真番号 197
資料番号 X-574、(59)

伝統的技法の伝承系図



製作のための材料は、その集落の生活資源の共同採取の場（イウォロ）で採取されてきた。チセ（家）の建築材料や食料もイウォロから採取されてきたといわれ、その記録は 1950 年を前後して行われた日本民族学協会の総合調査団（石田英一郎、泉靖一ら）による沙流川流域アイヌ文化に関する調査報告に記されている。

説明・証明資料

出典：泉靖一「沙流アイヌの地縁集団における IWOR」『民族学研究』16/3-4 日本民族学協会 1952 pp213-229

< 抜粋箇所 > p222 より

kim-un-iwor は狩猟の場であるばかりでなく、食用、衣料、建築材料、燃料、狩猟用毒物等としての草木の採集場でもあった。

イタは地域では生活に欠かせないものとして使用されながら伝統的技術・技法が継承されてきたと共に、1960 年代から 70 年代にかけての高度経済成長期には観光の隆盛と関わりながら、土産品としても地域の生活・文化・経済に大きな役割を果たしてきた。

現在は、地域の工芸家により構成される企業組合二風谷民芸が中心となって、工芸品の製造販売と技法の継承が行われている。

(2) 参考文献・資料

- 斎藤玲子「北方民族文化研究における観光人類学的視点(1)江戸～大正期におけるアイヌの場合」『北海道立北方民族博物館研究紀要 第3号』北海道立北方民族博物館 1994
- 萱野茂『物とこころ - 二風谷アイヌ文化資料館案内』山田佐永一郎
- 萱野茂『アイヌの民具』すずさわ書店 1978
- 泉靖一「沙流アイヌの地縁集団における IWOR」『民族学研究 16/3-4』日本民族学協会 1952

(3) 有識者等による歴史的検証に関する文献資料

平取町立二風谷アイヌ文化博物館（編）『北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション 国指定重要有形文化財調査報告書』平取町教育委員会（2003年3月）

収集品の中に貝澤ウエサナシ（二風谷）作のイタが含まれており、ウエサナシが木彫に携わっていた年代の記録から、現存品の 100 年以上前の歴史的証明にあたるものと判断される。

説明・証明資料

出典：平取町立二風谷アイヌ文化博物館（編）『北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション』国指定重要有形文化財調査報告書』（2003年3月）平取町教育委員会 p22 より

抜粋箇所

「幕末から明治時代にかけて、二風谷ではアットウシ（おひょう樹皮で織った反物）の製作、販売が行われていた。また明治 26（1893）年頃には、名工といわれる貝澤ウエサナシ、貝澤ウトレントクが木彫品の製作、販売に活躍した。二風谷の木彫民芸品の始まりといわれている。」

4．伝統的な技術又は技法

(1) 文様彫り

地域に伝わる独特の文様として、モレウノカ、アイウシノカ、シクノカなどのアイヌ文様を彫り込む。文様の陰影を深めるように、くぼみを彫る。また、主要な文様の周囲に二重線を入れて彫りの表情を豊かにする。

多様な文様があり、モレウノカなどが必ず使われている。文様は作り手によってアレンジされていてバリエーションがあるが、統一感を有している。モレウのゆるやかな巻き具合が二風谷イタの特徴とも言える。



モレウノカ

説明・証明資料

出典：『平取町史』(1974) 第四節 観光 p682 より

抜粋箇所

「アイヌ民芸品」製作・販売 1893(明治26)年、貝澤ウエサナシ、貝澤ウトレントクが、クルミ、カツラなどの材をもって、アイヌ文様を彫り込んだ盆や茶托を作り、札幌で販売した。これは、この地方における「アイヌ木彫民芸品」製作、販売の嚆矢である。

(2) ウロコ彫り

地域に伝わる地模様的一种で、文様と文様の間のスペースをデザインとして埋めるラムラムノカを巧みに使用しているのが地域の特徴と言える。



ラムラムノカ(ウロコの形)

5．伝統的に使用されてきた原材料

木材(主にクルミ、カツラ、エンジュなど)

証明資料・現存物

・クルミ、カツラ = 「アイヌ民芸品」製作・販売 1893(明治26)年、貝澤ウエサナシ、貝澤ウトレントクが、クルミ、カツラなどの材をもって、アイヌ文様を彫り込んだ盆や茶托を作り、札幌で販売した。これは、この地方における「アイヌ木彫民芸品」製作、販売の嚆矢である。 < 『平取町史』(1974) 第四節 観光 p682 より >

・クルミ = 貝澤ウトレントク(1862~1914)作 イタ

・エンジュ = 貝澤ウエサナシ(1860~1939)作 イタ 平取町立二風谷アイヌ文化博物館所蔵

6. 伝統的工艺品指定申し出に係る工艺品名

二風谷イタ 盆

” 茶托

現在の二風谷イタの主な製品



角盆



丸盆



茶托

7. 伝統的工艺品申出理由と指定の効果

(1) 申出理由

イタ[ita] を含む沙流川流域アイヌ工艺品は、100 年以上前から沙流川流域に住むアイヌの人々(sar-un-kur)などによって受け継がれてきた。

イタは地域では生活に欠かせないものとして使用されながら伝統的技術・技法が継承されてきたとともに、1960 年代から 70 年代にかけての高度経済成長期には観光の隆盛と関わりながら、土産品としても地域の生活・文化・経済に大きな役割を果たしてきた。

しかし、現在では、他の地域に比べアイヌ文化を継承する人は多いものの、高齢化(50～70 代中心)が進んでおり若い世代が少なく担い手不足であることや、高度な技術を必要とするため生産力が低く生業と直接結びつきにくいこと、古くから使用してきた原材料の持続的な確保が難しくなっていること、新たな商品開発が進んでいないことなどの課題を抱えている。また、1970(昭和 45)年に二風谷にあった 50 軒近くの民芸店は、近隣町の国道開通に伴う観光ルート変更による観光客の減少や観光客のニーズ変化による購買品の変化などの影響を受けて転職者が増加し、1990 年代初めにはほぼ半減に近い状況となり、1999(平成 11)年の国道沿線整備を機に現在の 6 軒に減少している。

これらの課題の前提となる最重要項目は、沙流川流域アイヌ工芸を現在に伝えてきた先人のアイヌ文化への誇りと精神、技術向上へのたゆまぬ努力を受け継いできた、現在の工芸家

の誇りをさらに高めることであり、イタを含む沙流川流域アイヌ工芸品が伝統的工芸品として認められることが、沙流川流域アイヌ民族の誇りを高めることにも繋がると言える。

これらのことから、課題である後継者不足、原材料の確保不足、商品開発の遅れ等を解決すべく、伝統的な技術・技法を保ちつつ、人材育成、ブランド化、新たな商品開発などを行いながら、伝統的工芸品産業の振興に関する法律に基づき、伝統的工芸品の指定申し出を行うことにより、伝統工芸に係る産業の振興を図ろうとするものである。

(2) 指定の効果

世界的に先住民族の存在を尊重する機運が高まっている中、2007(平成19)年9月に「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が国際連合総会で採択されたことに続いて、2008(平成20)年6月には、「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が衆参両院本会議において可決された。それを受けて、政府は「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」を設け、2009(平成21)年7月にその報告をもとに今後のアイヌ政策に関する指針を立て、2010(平成22)年1月には、内閣官房長官を座長とする「アイヌ政策推進会議」を発足した。

それらの動きを受けて、平取町では2010(平成22)年3月に「アイヌ文化振興基本計画」を策定し、生業に結びつき息づくアイヌ文化の継承を目標に掲げ、その具体化を進めるために、平取町アイヌ伝統工芸の振興とアイヌの伝統的食文化の活用、アイヌ文化の見学や体験を取り入れた交流産業の推進、精神文化の拠りどころとなる自然環境の保全と継承対策の推進、という3つの先行プロジェクトを定めている。

その中で、地域の産業振興にもつながるの伝統工芸の振興に関して、平成22年度より平取町アイヌ伝統工芸の商品開発と地域ブランド化に取り組んでいる。百年以上前から今に伝わる沙流川流域アイヌ伝統工芸品について、sarunkur aynu(サルウングル アイヌ)という新たなブランドを立ち上げ、これまでの伝統工芸品のさらなる継承とともに現代のニーズに即した商品開発に着手しており、道内外のギャラリーや札幌駅前通地下歩行空間を使ったPR活動も行っている。さらに、伝統工芸を紹介する博物館・資料館と民芸店を結ぶ「匠の道」の命名など、着地型観光の形成による販売促進の基盤づくりも行われている。

しかしながら、伝統工芸品を取り巻く近年の状況は、景気の低迷やニーズの多様化に伴う需要の低迷、人材・後継者の不足など多くの課題に直面しており、その対応策が急務となっていることから、二風谷イタが伝統的工芸品に指定されることで工芸品の認知度が高まるとともに、二風谷イタの生産に従事している人々の誇りと自信を喚起し、販路拡大や販売促進に大きく貢献し、これからの伝統工芸品産業の振興に寄与するものと期待される。

8. 製造される地域

北海道沙流郡平取町

9. 製造地域の概要

北海道沙流郡平取町(主として二風谷)において産地を形成している。

平成24年9月時点の製造事業者数は14。従業員数は28名。

10. 申出に係る協同組合等の概要

(名称) 企業組合二風谷民芸 (任意団体)

(設立) 昭和 39 年 12 月 26 日

(組合等の概要)

	出荷額 (百万円) (うち、伝産品)	製造事業者数 (件) (うち、伝産品製 造事業者数)	従事員数 (人) (うち、伝産品従 事者数)
平成 23 年度 (企業組合二風谷民芸)	6 (6)	14 (14)	28 (28)

昭和 40 年代の最盛期は 850 万円程度の出荷額がみられた。
直近の 5 年間の出荷額の推移は、ほぼ横ばいの状況である。

二風谷アットウシの概要

1. 二風谷アットウシとは

沙流川流域に古くから伝わり、現在は主として平取町二風谷で伝統的技法が継承されている、オヒョウ等の樹皮の内皮から作った糸を用い機織りされた反物のことで、着物や半纏、前掛け・帯や小物類等に使用される。



2. 工芸品の特徴と手工業性について

(1) 特徴

アットウシは、アツニ（オヒョウ）等の樹皮の繊維で糸を作り、アットウシカラペ（機織り機）を使って織られた反物のことを言い、その作業の多くが女性の手によるものである。織物の特徴としては、水に強いことや通気性に優れていること、天然繊維としては類稀な強靱さと独特の風合いを持っていることなどが挙げられる。

二風谷アットウシは特に糸に撚りがかかることが特徴と言われている。

(2) 手工業性

二風谷アットウシの製造工程は、糸裂き、機結び、糸撚り、受け糸取り、機織り等、多岐にわたっており、それぞれの工程において手作業となっている。

3. 沿革・伝統性について

(1) 生産の沿革

100年以上前から沙流川流域に住むアイヌの人々（sar-un-kur）などによって受け継がれてきた。江戸期には既にこの沙流川流域の物産として他地域との取引が行われていたことから、当時すでに、沙流川流域で作られたアットウシが他には類を見ない優れた土地の産品として重要視されていたことが伺える。

説明・証明資料

出典：「近世北海道におけるアットウシの産物化と流通」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第8号』本田優子（2002）pp26-27

< 抜粋箇所 >

1809（文化6）荒井保恵『東行漫筆』
サル < 買入 > アツシ 3枚 900文
1857（安政4）玉虫左太夫『入北記』
サル < 買入 > アツシ 1反 275文

1880年及び1881年の物産算出状況を、郡村単位でまとめた統計書である『諸物産表 明治十三年 明治十四年』にこの土地で多くアットゥシが生産されていたことが記録されており、1878年に当地を訪れたイザベラ・バードも、著書の『日本奥地紀行』の中でアットゥシを紹介している。

説明・証明資料

出典：『平取町史』渡辺茂・河野本道（編）、平取町発行（1974年）pp265-268

（1881年（明治14年）『沙流郡産物表』より）

村別	品目	生産収穫	販売量
紫雲古津村	アツシ	110反	15反
1.00	15.00		
荷葉摘村	アツシ	3反	
荷葉村	アツシ	50反	10反
1.00	10.00		
平取村	アツシ	200反	40反
1.00	40.00		
二風谷村	アツシ	110反	30反
1.00	30.00		
荷負村	アツシ	100反	20反
1.00	20.00		
長知内村	アツシ	50反	10反
1.00	10.00		
幌去村	アツシ	30反	20反
1.00	20.00		
貫気別村	アツシ	25反	10反
1.00	10.00		

説明・証明資料

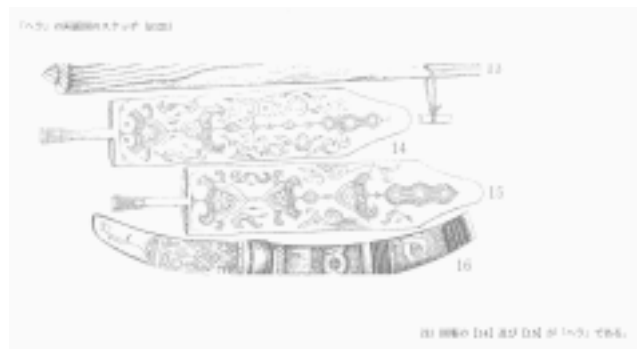
出典：『日本奥地紀行』（訳：高梨健吉）平凡社発行（2000年）pp426-428

< 抜粋箇所 >

彼女たちは蓆や樹皮製織布を、部分としてか、できれば完成品として売る。しかし彼女たちの夫はその儲けを奪いとるようなことはしない。アイヌの女性はすべて樹皮で布を織ることを知っている。男たちは樹皮を五フィートの長さに細長く切り、外皮を取り去って家に持って来る。この内側の樹皮は剥げば簡単に数枚の薄い層となる。この薄皮を年長の女たちが非常に細長く裂き、実にきれいに結んで繋ぎ、これを巻いて約一ポンドの重さの糸玉にする。これを織るときには、樹皮にもこの糸にも少しも加工する必要がない。しかし、女たちのあるものが、樹皮を煎じて褐色の染料を作り、その汁に浸して淡黄色を濃くしているのを見ている。

織機はとても簡素なもので、説明をしたらかえって複雑にしてしまうのではないかと思うほどである。頑丈な鉤を床に固定し、それに織糸の端を結びつけ、織り手の腰に機織の端を綱で結びつける。織り手は織糸を必要に応じて巧みに強く張る。櫛のような枠を足首の上にのせ、その中に糸を通す。中空の滑車があって、糸を上下に離しておく。彫刻した木で作ったへら形の枠があり、織った布を巻いてゆく巻き取り機がある。織布の長さは一五フィートで、布幅は一五インチである。非常に整然と織られ、糸の結び目は下側に出るように注意を払ってある。織る仕事は実にのろろとして疲れる仕事であって、一人で一日にせいぜい一フィートしか織ることはできない。織り手は道具類を全部腰につけ、機織といえるほどのものではないが、足首にのせて床の上に座っている。背骨を硬直させて適当に糸を強く張っておけるようになるまでには長い練習が必要である。作業が進むにつれて、彼女はほとんど気がつかないうちに鉤の方に引き寄せられてゆく。この家でも、他の大きな家でも、二人か三人の女が朝に自分の織布を持って来て、鉤に固定し、一日中織っている。またあるものは、おなじような便宜がないので、地面に鉤を差しこみ、日向で織っている。織布と織機は二分間で畳んでしまうことができる。そして長椅子用の編み毛布のように簡単に運び去ることができる。これは、手織機の最も単純で、おそらく最も原始的な形態のものであろう。櫛も枠も、巻き取り棒も、すべて簡単に普通の小刀で作られる。

また、1881年に発表されたハインリッヒ・フォン・シーボルトの『蝦夷島におけるアイヌの民俗学的研究』に現在と同様の道具で織るアットゥシのことが紹介されており、道具の一つである「へら」のスケッチが記録されている（右図）。



最近の調査結果では、ウイーンの民族学博物館に保存されているアットウシの織機一式と織りかけのアットウシの資料(下写真)が、1878年にシーボルトが収集したものであり、スケッチとして残しているものと同じであることが判明している。

1904年には、フレデリック・スターによって収集されたアイヌ工芸品に、この地域のアットウシが記録されている。



第9章 スターが収集したアイヌ資料のリスト

《1》スターが1904年に収集した資料

[Fieldnotes: Aomori Trip, 1904, Nos. 1-3 による]

1. Carrying strap [U. Piratoci]
2. Wooden spoon. [U. Piratoci]
3. Sack of bark [U. Piratoci]
4. Bark cre tray [U. Piratoci]
5. Bark biter ladle [U. Piratoci]
6. Bitter bear arrow [U. Piratoci]
7. Mustache lifter [U. Piratoci]
8. Thread-winder-carved III [Piratoci]

113. Quiver, bow, arrows poisoned. [Piratoci]
116. Carved tray. [Piratoci]
117. Aomori dress, apron, belt, etc. [Piratoci]
118. Toys-carved. [Nippon]
119. Bark dish-small. [Nippon]
120. Bear paw pads. [Nippon]

平取の「アットウシ」の記述

アットウシ制作のための材料は、その集落の生活資源の共同採取の場(イウォロ)で採取されてきたものと考えられる。チセ(家)の建築材料や食料もイウォロから採取されてきたといわれ、その記録は1950年を前後して行われた日本民族学協会の総合調査団(石田英一郎、泉靖一)による沙流川流域アイヌ文化に関する調査報告に記されている。

説明・証明資料

出典：泉靖一「沙流アイヌの地縁集団におけるIWOR」『民族学研究』16/3-4 日本民族学協会 1952 pp213-229

<抜粋箇所> p222より

kim-un-iworは狩猟の場であるばかりでなく、食用、衣料、建築材料、燃料、狩猟用毒物等としての草木の採集場でもあった。...(中略)...

衣料の原料たるオヒヨウ(at-ni)は山奥にあって、傾斜の急なところに多く、3月又は6月に採集する。この作業は雪のある時期でもあり、しばしば危険が伴うので(谷に落ちて死者を出すこともしばしばある。)男の仕事である。オヒヨウの木を見つげると、幅8寸長さ3間くらいの大きさに刻みを入れて、その皮を剥がす。この大きさのもの2枚で厚司1枚が出来ると云う。3月の皮は良質のものだけが剥がれ易く、悪質の皮は切れてしまう。6月の皮は質の如何にかかわらずよく剥げると云われている⁽¹⁾。オヒヨウは川の源流地帯に見られる植物であるから川口近いkotanのiworでは余り発見されない。ために後述するように彼らは源流のkotanのiworに入会を許可してもらわなければならない。

注：(1)BATCHELOR and MIYABE, Aino Economic Plants. The Transactions of the Asiatic Society of Japan, Vol. , 吉田巖「アイヌの衣食住」『人類学雑誌』31巻9号。

アットウシは地域では生活に欠かせないものとして使用されながら伝統的技術・技法が継承されてきたとともに、1960年代から70年代にかけての高度経済成長期には観光の隆盛と関わりながら、土産品としても地域の生活・文化・経済に大きな役割を果たしてきた。

なお、他地域では一旦、伝承活動が低調になったが、引き続きアットウシが活発に行われていた平取(二風谷)に触発されて、平取の伝統的技法が他地域に普及したと言われている。

現在も、後帯機を100年前と同様に使用して伝統的技法が継承されており、地域の工芸家により構成される企業組合二風谷民芸が中心となって、工芸品の製造販売と技法の継承が行われている。

* H.v.シーボルト『小シーボルト蝦夷見聞録』1996に訳文が所収されている。

伝統的技法の伝承系図



(2) 参考文献・資料

- H.v.シーボルト著、原田信男ほか訳注『小シーボルト蝦夷見聞録』平凡社 1996
 渡辺茂・河野本道(編)『平取町史』平取町 1974
 萱野茂『物とところ - 二風谷アイヌ文化資料館案内』山田佐永一郎
 泉靖一「沙流アイヌの地縁集団におけるIWOR」『民族学研究 16/3-4』日本民族学協会 1952

(3) 有識者等による歴史的検証に関する文献資料

本田優子「近代北海道におけるアットウシの産物化と流通」北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第8号(2002年3月)

1800年代と1850年代のアットウシの主な産出地と産出量を紹介するなかで、沙流川流域(サル)に関する記述を紹介している。

説明・証明資料

出典

「近代北海道におけるアットウシの産物化と流通」本田優子
 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第8号(2002年3月)

< 抜粋箇所 >

1809(文化6) 荒井保恵『東行漫筆』
 サル < 買入 > アツシ 3枚 900文
 1857(安政4) 玉虫左太夫『入北記』
 サル < 買入 > アツシ 1反 275文

本田優子「近代北海道におけるアットウシ産出の様相を解明するための予備的考察 開拓使の統計資料の整理と分析を中心に」

北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第9号(2003年3月)

近代の北海道におけるアットウシ産出状況を開拓使の統計資料に基づいて紹介するなかで1870年代の産出地の記録に沙流を紹介している。

説明・証明資料

出典

「近代北海道におけるアットゥシ産出の様相を解明するための予備的考察 開拓使の統計資料の整理と分析を中心に」 本田優子
北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第9号(2003年3月)

< 抜粋箇所 >

(1878年の産出高が記された表)

国	郡	戸数・人口	反数	価格(円)
日高	沙流	370・1,651	厚子 162反	81.00

4. 伝統的な技術又は技法

- (1) 糸裂き：揉むようにして何層にもなっている樹皮の内皮を剥がして1枚にし、指先を使って一定の細さ(2mm程度の幅)の裂き糸をつくる
- (2) 機結び：結び目を小さくするための結び方で、糸先に撚りをかける
- (3) 糸撚り：糸の両端を持ち、左手は内側へ右手は外側へねじるように糸に撚りをかける
- (4) 受け糸取り：上下を交差させるように下になっている糸を取る
- (5) 機織り：座って織る技法で、腰板によって張力をかけた状態で上下に分けた縦糸の間に一回ごとに横糸を通し、縦糸も上下させて織る

「受け糸取り」の様子



100年以上前にかつて使用されていたアットゥシの道具と現在使用されている道具は一貫した連続性があることがわかっている。

ロシア民族学博物館には、1912年にロシア民族学博物館の臨時職員であったV.N. ヴァシーリエフによって1912年に沙流川流域で収集されたアットゥシの道具(右写真)が所蔵されており、現在の道具と同様の構成となっている。

また、寛政年間に近藤重蔵の北海道曾遊に同行した秦檜麿が、当時のアイヌの風俗(生活、文化等)を1798

(寛政10)年から1823(文政6)年までの20年余りを費やして描いた『蝦夷生計圖説』には、当時のアイヌの社会や文化について図化されており信憑性が高いとされている。

この絵図集は、近藤重蔵との同行の足跡から、沙流地域や宗谷地域のアイヌについて書かれていると推察され、この中にアイヌのアットゥシ制作の工程についての下記の絵図が掲載されており、現在も平取では、ほぼ同じ工程でアットゥシが行われている。



説明・証明資料

出典：「蝦夷生計圖説」解説者のことば

< 抜粋箇所 >

これらの動きを側面から捉え、アイヌの良俗を破壊するものとする危機感を抱いた幕吏がいた。普請役雇の村上島之充（泰穩磨）がそれである。

島之充にとって蝦夷地は曾遊の地であった。寛政十年には近藤重蔵に随行してクナシリ島まで赴き、其後も引続いて蝦夷地在勤となっていたので、サルモンベツでは長老のヤイバルを識り、ソウヤでは有力者のオタトモンクルなどから、アイヌの文化を教えられ、その意義に共感したことから『松前考』を著わし、次いで大著『蝦夷島奇観』を編述することによって、失われようするアイヌの習俗を描き、後世に伝えようとした。その序文に「去年（寛政十一年）の春、公の命ありて、教育頻々たるか故に、毛夷等や、服せるに似たり。故に其旧來の形容および産業の器物、見ぬ人の為にも聊小録して……」（初稿）として執筆の動機を述べており、さらに細叙の目的から『臚臚漁図説』（文化二年成）、『鬚髮之図説』を著わし、なおも木幣（イナヲ）、居家（チセカル）等を分類する図説の執筆に着手したが、文化五年（一八〇八）に病歿し、未完で挫折するに至った。



1 荒皮剥ぎ



2 樹皮加工



3 糸紡ぎ



4 糸玉作り



5 横糸つくり



6 糸延ばし
(次ページに続く)



7 機織り



6 反物

5. 伝統的に使用されてきた原材料

オヒョウ、シナノキ

説明・証明資料

出典

本田優子「近世北海道におけるアットウシの産物化と流通」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第8号』北海道立アイヌ民族文化研究センター（2002）pp1-40

< 抜粋箇所 > p5 より

「i）素材となる植物

アットウシの素材について、『新撰北海道史』⁽¹⁾には「木皮の繊維（オヒョウの樹を主とす、又アカタモの樹も用ひる）を以てアツシを織り、草の繊維（樺太蝦夷はイラクサの繊維を用ゐる本島蝦夷も亦同繊維を以て弓絃を製す）を採つてイタラツベを織る」とあり、オヒョウ、アカダモ（ハルニレ）、イラクサという3種類の植物名が挙げられている。これに対し、『新北海道史』⁽²⁾では、オヒョウが抜け、代わりにシナノキが加わり「シナ、ニレ、イラクサ」の3種となっている。また、素材をほぼオヒョウに限定する見解もある⁽³⁾。

前掲の『アイヌ文化誌ノート』では、「アットウシ（ここでは樺太アイヌのレタラペをも含める）は、素材からいえば、オヒョウを主体とした木の靱皮（甘皮）繊維を織った布またはそれで作り出した衣服であり、レタラペはいらくさの内皮を利用している」としたうえで、『アイヌ民族誌』⁽⁴⁾に基づき、その素材を（1）にれ科 おひょう はるにれ（2）しなのき科 しなのき おおぼだいじゅ（3）にしきぎ科 つるうめもどき（4）いらくさ科 えぞいらくさ むかごいらくさ、と分類整理している⁽⁵⁾。

以下、この分類に従って検討してみたい。

オヒョウ

アットウシの素材として、ほとんどの文献・史料においてまず第一に名前が挙げられているのがオヒョウである。19世紀の北海道に関するすぐれた記録を残している菅江真澄は「よきアツシはヲヒヤウといふ木の皮をはぎ糸（ガ）として、これをアツといふ」⁽⁶⁾と述べている。また、今日に伝わる樹皮衣資料のほとんどがオヒョウの靱皮繊維でつくられていることから、アットウシの主たる素材とみなすことができる。

なお管見の限り、アットウシの素材としてのオヒョウの文献・史料上の初出は、1739（元文4）年の坂倉源次郎『北海随筆』⁽⁷⁾にみえる「衣はヲヒヤウと云木の皮を以てメノコシ手織にし、是をアツシと云」という記述である。」

注：

(1) 『新撰北海道史』第二巻通説一、北海道庁、1937、p.19

(2) 『新北海道史』第二巻通説一、北海道、1970、p.44

(3) 大塚和義『アイヌ海浜と水辺の民』新宿書房、1995。菊池勇夫『アイヌ民族と日本人』朝日新聞社、1994。渡辺茂『北海道歴史事典』北海道出版企画センター、1982、など

(4) アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌』第一法規出版、1969、p.246～250

(5) 佐々木利和『アイヌ文化誌ノート』古川弘文館、2001

(6) 菅江真澄『蝦夷廻天布利』（1791）『菅江真澄全集』第二巻、未来社、1971、p.128

(7) 坂倉源次郎『北海随筆』（1739）高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』第四巻、三書房、1969、p.409

6. 伝統的工芸品指定申し出に係る工芸品名

二風谷アットウシ 着尺

〃 伝統的衣装：二次加工品（着物、手甲、脚絆）

〃 和装用品：帯地

〃 装飾用品：織布品（壁掛け等）、二次加工品（小物類）

現在の二風谷アットウシの製品（二次加工品を含む）



反物（着尺）



アットウシを用いた伝統的衣装



染色したアットウシとバッグ



帯地



小物入れ



財布、名刺入れなど



栞、小物入れなど

7. 伝統的工芸品申出理由と指定の効果

(1) 申出理由

アットゥシ[attus] を含む沙流川流域アイヌ工芸品は、100 年以上前から沙流川流域に住むアイヌの人々(sar-un-kur)などによって受け継がれてきた。

アットゥシは地域では生活に欠かせないものとして使用されながら伝統的技術・技法が継承されてきたと共に、1960年代から70年代にかけての高度経済成長期には観光の隆盛と関わりながら、土産品としても地域の生活・文化・経済に大きな役割を果たしてきた。

しかし、現在では、他の地域に比べアイヌ文化を継承する人は多いものの、高齢化(50~70代中心)が進んでおり若い世代が少なく担い手不足であることや、高度な技術を必要とするため生産力が低く生業と直接結びつきにくいこと、古くから使用してきた原材料の持続的な確保が難しくなっていること、新たな商品開発が進んでいないことなどの課題を抱えている。また、1970(昭和45)年に二風谷にあった50軒近くの民芸店は、近隣町の国道の開通に伴う観光ルート変更による観光客の減少や観光客のニーズ変化による購買品の変化などの影響を受けて転職者が増加し、1990年代初めにはほぼ半減に近い状況となり、1999(平成11)年の国道沿線整備を機に現在の6軒に減少している。

これらの課題の前提となる最重要項目は、沙流川流域アイヌ工芸を現在に伝えてきた先人のアイヌ文化への誇りと精神、技術向上へのたゆまぬ努力を受け継いできた、現在の工芸家の誇りをさらに高めることであり、アットゥシを含む沙流川流域アイヌ工芸品が伝統的工芸品として認められることが、沙流川流域アイヌ民族の誇りを高めることに繋がると言える。

これらのことから、課題である後継者不足、原材料の確保不足、商品開発の遅れ等を解決すべく、伝統的な技術・技法を保ちつつ、人材育成、ブランド化、新たな商品開発などを行いながら、伝統的工芸品産業の振興に関する法律に基づき、伝統的工芸品の指定申し出を行うことにより、伝統工芸に係る産業の振興を図ろうとするものである。

(2) 指定の効果

世界的に先住民族の存在を尊重する機運が高まっている中、2007(平成19)年9月に「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が国際連合総会で採択されたことに続いて、2008(平成20)年6月には、「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が衆参両院本会議において可決された。それを受けて、政府は「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」を設け、2009(平成21)年7月にその報告をもとに今後のアイヌ政策に関する指針を立て、2010(平成22)年1月には、内閣官房長官を座長とする「アイヌ政策推進会議」を発足した。

それらの動きを受けて、平取町では2010(平成22)年3月に「アイヌ文化振興基本計画」を策定し、生業に結びつき息づくアイヌ文化の継承を目標に掲げ、その具体化を進めるために、

平取町アイヌ伝統工芸の振興とアイヌの伝統的食文化の活用、アイヌ文化の見学や体験を取り入れた交流産業の推進、精神文化の拠りどころとなる自然環境の保全と継承対策の推進、という3つの先行プロジェクトを定めている。

その中で、地域の産業振興にもつながる の伝統工芸の振興に関して、平成22年度より平取町アイヌ伝統工芸の商品開発と地域ブランド化に取り組んでいる。百年以上前から今に伝わる沙流川流域アイヌ伝統工芸品について、sarunkur aynu(サルウンクル アイヌ)という新たな

ブランドを立ち上げ、これまでの伝統工芸品のさらなる継承とともに現代のニーズに即した商品開発に着手しており、道内外のギャラリーや札幌駅前通地下歩行空間を使ったPR活動も行っている。さらに、伝統工芸を紹介する博物館・資料館と民芸店を結ぶ「匠の道」の命名など、着地型観光の形成による販売促進の基盤づくりも行われている。

また、フランスの世界的な高級ブランド「エルメス」は、先住民族の文化に着目し、アイヌ文様を取り入れたスカーフをすでに販売しており、伝統的なデザインを取り入れた新しい製品開発の可能性を示唆している。とりわけアットゥシは、着物や帯地、壁掛け、小物類など二次加工の選択の余地も幅広いことから、今後、有名デザイナーとのコラボレーション（共同作業）などによる新商品の開発などが考えられる。

しかしながら、伝統工芸品を取り巻く近年の状況は、景気の低迷やニーズの多様化に伴う需要の低迷、人材・後継者の不足など多くの課題に直面しており、その対応策が急務となっていることから、二風谷アットゥシが伝統的工芸品に指定されることで工芸品の認知度が高まるとともに、二風谷アットゥシの生産に従事している方々の誇りと自信を喚起し、販路拡大や販売促進に大きく貢献し、これからの伝統工芸品産業の振興に寄与するものと期待される。

8. 製造される地域

北海道沙流郡平取町

9. 製造地域の概要

北海道沙流郡平取町（主として二風谷）において産地を形成している。

平成24年の製造事業者数は14。従業員数は28名。

10. 申出に係る協同組合等の概要

（名称）企業組合二風谷民芸（任意団体）

（設立）昭和39年12月26日

（組合等の概要）

	出荷額（百万円） （うち、伝産品）	製造事業者数（件） （うち、伝産品製造事業者数）	従業者数（人） （うち、伝産品従事者数）
平成23年度 （企業組合二風谷民芸）	5 (5)	14 (14)	28 (28)

昭和40年代の最盛期は1,500万円程度の出荷額がみられた。
直近の5年間の出荷額の推移は、ほぼ横ばいの状況である。